築地体前期五号仮名

わが国の本文用仮名のありかたを示した記念碑的書体

小宮山博史

築地体前期五号仮名は、明治二七（一八九四）年六月改正『五号明朝活字書体見本』★図三四収録の見本から覆刻しました。

ただし「前期五号」という名称は今まで使われたことはありません。この名称は府川充男氏☆註四四が命名したものです。印刷史研究会でもこの名称を使って築地活版の五号仮名を分類しています。「前期五号」といっていますが正確にはこの仮名の前にもう一つの五号仮名が存在いたします。しかしそれは模索期の書体の特長である字形のふれ、試行錯誤のあとがわかる一字種複数字形をとっているものです。活字書体は一字種一字形に定着することで、どこに使われても同じ字形であることから人々に書体を意識させ

ないようになり、その結果いろいろな内容の文章に対応できる効果を持つことが出来ます。ですから前期五号の前に出現した仮名はいわば暫定的なものです。

手元にある築地体前期五号仮名に先行する「模索期仮名」を使ったものども古い印刷物は、明治六（一八七三）年十一月二五日付『官許東京日々新聞』第五四一号です。^{★四四五}この書体は正式には築地活版の前身である平野活版

で作られたものです。本木昌造に全権をゆだねられた平野富二は明治五年七月新鑄の五号活字を持って長崎から東京に進出します。東京日々新聞は第五四〇号（十一月二四日）から勸工寮製^{☆註四五}の活字よりはるかに品質が高いこの平野活版の新鑄五号に一挙に切り替えます。第五三九号までは、明治二年一月から四ヵ月にわたってウィリアム・ギャンプルから活字制作・活字印刷の講習を受け、講習後本木昌造達と袂を分かった人達が抛る勸工寮製の活字を使っていました。第五三九号の発行は十一月二二日ですが、翌二三日は休刊日ですのでこの日に活字すべてを入れ替えただけです。

先行する模索期平仮名は文字の大小が目立ち、正方形化が未成熟ですが、平仮名を正方形の中に入れるなど常識の外であった時代に、よくこの形までもってきたものだど感心いたします。片仮名の横画は水平で細く右端には明朝体の特長である「ウロコ」を付けています。これこそ明朝体片仮名ですが、漢字と差別化しにくい字形もできてしまうので、このデザインは破棄されたのかもしれない。

模索期仮名が破棄され、前期五号仮名が東京日日新聞に登場するのは、明治七年五月一四日付第六八七号ですので、制作時期は明治六あるいは七

★四三四……東京築地活版製造所『五号明朝活字書体見本全』（明治一七年六月改正）収録の仮名見本。現在使われている「えいお」の字形が「万葉仮名」に分類されている。また分合文字もまだ使われていることがわかる。【一三八～一四二頁参照】

☆註四四……府川充男 タイポグラフィ・近代日本活字印刷史研究家。著書：共著に『組版原論』『漢字問題と文字コード』『本と活字の歴史事典』『日本の近代活字』などの他に印刷史、組版、漢字字体史関係の論著多数。昨年二月『難読語辞典』を大田出版より刊行。今年三月に長年の書体史研究の集大成とも言うべき三〇〇頁におよぶ大著『聚珍録』を三省堂より刊行する。印刷史研究会会員、日本規格協会電子文書処理システム標準化調査委員会WG2委員。

☆註四五……勸工寮 現在の国立印刷局。ウィリアム・ギャンプルの印刷・活字製造の講習を受けた人々は二派に分かれ、一つは本木昌造の新町活版所にゆきもう一派は長崎製鉄所に残り、後に東京に移り工部省勸工寮活字局となる。組織の改編にともない名称を次々と変えて昭和二七年八月大蔵省印刷局となり、平成一五年四月独立行政法人国立印刷局となる。

★四三五……模索期の五号仮名を使った『東京日々新聞』第五四一号（明治六年十一月二五日）勸工寮製の活字から平野活版の活字に替わったのは二三日の第五四〇号であるが、五四〇号には平仮名が使われておらず、五四一号に平仮名が使われている。片仮名でルビを振り、返り点送りがないも使っている。【一四二～一四三頁参照】

斗ユキシヘヒズナリテ何處へ行
わカらズ其親コトも大身心
、かシこト搜メし居ルし處へ忽タヤ
りて右の子コどもを連レ來シて
は千束村の松崎源次郎鈴
申ス者ノなり先刻我宅の近所
の泣ナ聲ノはげしく聞クえ候也

年ということになります。種字彫り師は明治五年に入社した竹口芳五郎でしようか。前期五号仮名に切り替わったといっても、第二面の「報告」(広告)は以前の仮名を使って組んでいます。平仮名の何字かはまだ古いものが残っていますし、新旧のものが混在して使われてもいます。この新刻の仮名は文字に傾きのゆれがあり、大きさに大小は残っています。模索期仮名にくらべ正方形への定型化は格段に進んでいます。字形や線質には今の書体に見られない躍動感があり、荒削りな造形に創成期の意気込みが感じられ、美しい書体のひとつです。しかし片仮名は水平な横線、先端のウロコなど模索期仮名をそのまま使っています。

この平仮名はその造形の新鮮さと美しさによって、日本を代表する本文書体として多くの活字鋳造所から販売され、また部分的に改刻されながら長期間にわたり使われ続けたのもポピュラーな書体となりました。

第六八七号はマイクロフィルムからの複写資料しかなく見にくいので、手元にある第七六五号(八月八日)を図版として掲載しますのでご覧ください。
★図六
五

ではなぜ日本で五号活字が本文用として定着したのでしょうか。明治二(一八六九)年一月上海から明朝体六サイズを導入したとき、Small Pica(一ポイント、五号、角寸法約三・七ミリ)が上海の北米伝道会印刷所の本文用として使われていたが、大きくもなく小さくもなく適当な大きさと本木昌造等は感じたのか、あるいはそんなに複雑に考えずただ做っただけなのか、わかりませんが、寧波に着任したウイリアム・ギャンブルは欧米人にとっての基本サイズであるPica(二ポイント)で漢字活字を作らず、明確な意志をもって一ポイント小

★図三六……前期五号を使用した「東京日々新聞」第七六五号(明治七年八月八日)この号にはルビはあるが、返り点送りがなの使用は見られない。
〔四四〜四五頁参照〕

いれて古來いま	ヲ覆ヒ行人ヲシテ
の盛んなるを聞	用ヒカヲ竭ス一視
快ならしむるの	中守領主タリシ時
まだ氷を用ゆる	ノ間米五十俵ゾ、
れてガリ／＼と	田ヲ報徳田ト稱シ
しうらず少しな	ルヲナク年々救貧
へバ俄くは極冷	圓八十八錢尙現ニ
を引き起す事あ	村ニ會議ヲナシ米
葡萄酒ビール水	發明セシモノヲ討
是れ腸胃を爽快	徳ニ報シテヲ謀ル
氷片の只具の水	幼沖ノ頃慈母ノ庭
すして碗中は殘	遺忘ニ備へ六七餘
て削り卸して水	膚ヲ離サズ恪守セ
多く食ふの悪し	ラレ其賞トシテ三
俄然神氣の異常	予嚮キニ南橋散
は中風を發せん	評シ以テ貴社ニ
らずと静うは願	ノ勞ヲ煩ハシ狼
師隈川氏を招き	ハ義黙々止ム可
来る皆云はく決	香君ノ厚意ニ對
も身を勵めず時	○小學校

三才斗なる小兒と近隣の子ども六
七才ばかりなると三人あそび居り
しが不斗みへげなりて何處へ行し
か更母わからず其親ども大母心配
してこゝかして捜し居し處へ忽ち
二人ありて右の子どもを連れ来て云
く我等は千束村の松崎源次郎鈴木
卯八と申者なり先刻我宅の近所母
て小兒の泣聲はげしく聞え候也へ
人家をくなき此あたり母て不審な
事と立出て見る母年の頃二十才位
母て丈ひくさ大あばたの男あた
ハ一ッべついなるが壹人の小兒の着
たる羽織をはぎとり猶外のをも剝
とらんとせしが我等を見て驚き周
章て其羽織を手母持ち逃さす母釋
子をば下水の中へ突込でいざくと
もなく跡を暗しといふ母松村夫婦
は勿論其子の親ととも大母喜びて
此二人母厚く禮を述べけると也是
等騙拐の小賊近來まをも、多し世
上の金持子持等よろしく御用心あ
るべし
仙臺は奥羽の中央母ありて山母遠
り海を控へ伊達氏百萬石の業を起

合流して勢州桑名母至るを以て運
漕の都合よし近來その地の有志者
自費を以て新母天神橋道仙橋五家
橋といふ三ッの橋を掛け道路を修復
して諸人の便利を爲せり人力車も
甚繁昌なり近日又川蒸氣を以て桑
名四日市へ日々往返せんと官へ願
出たる義ありと聞く又七所の小學
校ありて生徒日々學母進めり又四
ヶ所の戲場ありて工商夜々其勞を
慰むる母足れりト然れども江勢濃
尾の地古來人氣輕薄母流る者多し
只恐る浮華多しして實功少からん事を
○信濃國小縣郡稱津村巖石川三平
と云る者は本年二十歳なりしが兩
三年前母父母兄弟母も死別れ夫の
みならず父の負債千三百余圓を引
受け消却の目途なきを以て身代を
差出し分散配當なさしめ其身は伯
父の厄介となり居たりしが頃日親
族商議の上洋人の小遣母住込んと
五圓餘の路金を持せて横濱へ遣わ
せしが府下湯島天神町高藤氏ば同
郷の人たるを以て尋ね行し母未だ一
面の知己ならずと雖も先面會して

一丁目高藤氏の許へ來り有し次第
を告人車の代貳圓七十五錢借受度
旨を請、高藤氏も其愚なるを怒れど
車夫の罪母もあらざれば其價の半
を拂ひて去しめ捨置べき母もあら
ざれば直母横濱へ同行し右小崎多
平方母至りて清助の事を問、母曾て
あらずと答ふ是母於て件の情實を
其區扱處へ届け歸京せし由なり
抑伊勢屋清助なる者同國人三平
が困難を聞て毫も恤むの念なく
却て彼を謀る其殘酷論を待ず又
小崎多平なる者も旅人を泊る母
其姓名を簿載せず商業上粗漏な
るは勿論御趣旨母も反する者と
云はん

物價日表

出來物
中印一斗七升山家小俵一斗七升五
合山手同掛川一斗八升一合岩瀨一
斗八升二合南部二斗秋田二斗一升
六合
洋銀六十一匁七分

待傳馬四二丁目子母

- 一 建家 間口拾間 壹ヶ所
- 一 土藏 間口二間半 壹ヶ所
- 一 障子 二拾二枚
- 一 建具 二拾枚
- 一 疊 二拾六疊
- 一 戸棚 壹ツ

申渡

本所南二葉町

勘藏弟

金原德藏

其方儀青井伴次方雇ハレ中金錢可
盜取存付同人ノ刀竊受出夜陰乗若
松縣權令澤簡德宅忍込深更至寢所
へ押入財ハ盜得スト雖同人悴簡廉
殺害致并同人妹タク疵負スル科改
正強盜律依斬罪申付

明治六年十一月廿二日

投書

予平生好テ騎行ス然ルニ小便所ヲ
設ケラレシヨリ乘馬ノモノ小便ス
ルニ便ナラズ往々火ニ困難ス願ク
ハ所々ノ小便所ニ馬繫杭一本ヲ添
玉ハントヲ願フ又過日カシ橋内ノ

ヤ十分ノ景况漸々其勢ヲ分チ遂ニ
方今ノ位價ニ陵遲シ加之國用モ亦
衍溢スルニ至ルコト管ニ政府ノ憂
ヘノミナラズ尙萬民ノ驚嘆スル處
ナリ雖然勢ノシカラシムル人力ノ
ヨク維持シガタキ者カ義ニ政府原
紙ヲ下シ玉フ一枚二拾錢ヲ以テシ
更ニ印稅拾錢ヲ加ヘテ三拾錢ヲ取
領シ玉ヒ後來其二分ノ一ヲ以テ卵
殼紙ヲ買上玉ハントヲ御布令アラ
ゼラレタリ當時以爲コレ專ラ濫製
ヲ壓抑シテ以テ公平ノ益ヲ振起ス
ルカ爲カト然ルニ前條輸出ノ位價
ハ陵遲シ國用ハ衍溢セシヨリ衆庶
ノ虛耗不少カ爲メ口耳相屬スルニ
至ル抑冀クハ政府サキニ收領シ玉
フ處ノ三十錢ヲ以テ更ニ現今國內
剩餘ノ卵紙ヲ御買上被遊候ハ、稍
陵遲ノ形勢ヲ挽回スルノミナラス
衆庶モ亦聊其虧缺ヲ補ヒ之ニ依テ
各活路ヲ得ハ大幸コノ上モナキト
ニ候ハンカ草野ノ匹夫妄言ノ罪ヲ
知ルト雖モ敢テ之ヲ貴社ニ投シ以
テ大方君子ノ黠竄ヲ仰グ

東京府下第一大區 四小區寄留 河田某

加入シ共ニ世ノ浩益ヲ謀ラン事ヲ希望ス因テ四方
有志ノ諸君ハ本月廿日ヨリ十一月二十日迄ニ第二
國立銀行へ願書ヲ差出シ給ハンヲ乞フ但加入ノ順
序及銀行ノ事務ヲ知り給ハンニハ別ニ株主募リ方
布告書アリ希望ニ任セ呈進スベシ

明治六年十月 橫濱 第二國立銀行

- 發 原 善三郎 茂木惣兵衛
- 起 吉田幸兵衛 金子平兵衛
- 人 増田喜兵衛

能ク人ヲ利スルモノハ亦能ク人ヲ害ス西洋藥品ノ
精且ツ密ニメ其病ニ奇功アル世人ノ皆能ク知ル所
ナレバ今復々贅スルヲ待タズ然ニ其能ク功アルヲ
以テ少シク其分量配合ヲ誤ル片ハ亦能ク人ヲ害ス
ルニ至ル固ヨリ彼ノ木皮草根ノ功モナク害モナキ
ガ如キニ非ズ故ニ之ヲ調製スルモノ其術ヲ研究セ
ズンバアル可ラス吾舖ノ如キハ其術ニ精キモノヲ
迎ヘ以テ誤ノ害ナカラシム其品如キハ英國ニ
注文ナシ最モ精良ナルモノヲ撰ヒ務メテ廉價ニ賣
リ益々其奇功ヲ奏セント欲ス幸ニ大方ノ君子臨來
セントヲ希望ス

淺草御門外瓦町八番地 躰壽堂

淺艸瓦町十六番

本局

日報社

編輯者 印務者

浦喜山景雄 條野傳平

東京日々新聞

第七百六拾五號

明治七年 八月八日
土曜日

公 聞

太政官布告第八十三號

明治六年^{十二月} 第四百貳拾五號布告家祿賞典祿奉還

ノ者へ資金被下規則第九條以下左ノ通增加候條此
旨布告候事

第九條

一前條諸拂下代金公債證書ニテ上納候分此度發行
ノ公債證書ニ候へハ他人ヨリ買求候分ニテモ不
苦候事

第十條

一諸拂下代金公債證書ヲ以テ上納被差許候ニ付正
金ニテ和納候者ハ九ヶ年壹割引ノ算法ヲ以テ
可受取事

但此度發行ノ公債證書ハ八朱ノ利附ニ付八ヶ
年壹割引算則ハ金千圓ニ付九百拾壹圓六十
四錢三厘七毛壹四ノ割合ニ候事

第十一條

一諸拂下代金七拾五圓上納スベキ處へ百圓ノ公債
證書上納候節ハ差引貳拾五圓ノ過金更ニ公債證
書ヲ以テ下渡スベキ事

但貳拾五圓以下ノ公債證書發行不致ニ付諸拂
下ヶ代金ノ内公債證書ニテ上納致シ候金高ヲ

○頃目東京横濱の市中ハ氷水を賣る店多し往昔氷
室の設け有しより以來夏ハ氷を賞玩する事既久
しど雖ども皆只高貴の家のみ行ハれて古來いま
だ今日の如く人民一般これを得るの盛んなるを聞
かず暑を消し渴を止め身をして涼快ならしむるハ
氷より善なるハなし然るハ世人いまだ氷を用ゆる
の方を知らずして氷の塊を口ハ入れてガリ／＼と
噛み碎き吞み込む人多し是れハ宜しくらず少しな
らばさしたる害もなければと多く喰ハバ俄クハ極冷
の物を以て腹中を冷す故ハ遂ハ病を引起す事あ
り西洋人の牛肉其他の食物を冷し葡萄酒ビール水
などハ氷片少しを加へて是を飲む是れ腸胃を爽快
よし神氣を健くならしむ然れども氷片ハ只其の水
酒を冷す爲なれば是れを吞み込まずして磁中ハ殘
し置けり市中の氷屋を見るハ飽^{やま}て削^けり卸^{おろ}して水
ハ入れ飲ましむるハ誠ハ妙なり只多く食ふハ惡し
○頃日肥田海軍大丞厨中ハ在りて俄然神氣の異常
なるを覺ふ肥田君思へらく是れ將ハ中風を發せん
とするの症ならん身を動かしむべからずと靜クハ願
を出て戶外ハ倒れ伏す由て急ハ醫師隈川氏を招き
來つて之れを診す又伊東大典醫も來る皆云ハく決
して勵らすべからず若し少しも身を勵らす時

業ヲ勵ミ儉ヲ守リ賑恤ヲ意トナシ貧村ヲ救濟スル
コ數次就中居村ニ於テハ百事世話行届キ一村ノ協
和一家ノ如ク風俗淳美ニシテ懶惰放逸ノ徒ナシ先
頃官員巡回ノ途次其居村ヲ通過セシニ山腹溪間悉
トク皆開墾至ラザルナク道路塵芥ヲ見ズ糞瓶汚穢
ヲ覆ヒ行人ヲシテ掩鼻閉目ノ患ナカラシム其意ヲ
用ヒ力ヲ竭ス一視以テ百事ヲ知ルベシ其前太田備
中守領主タリシ時安政元寅年窮民救助ノ爲六十年
ノ間米五十俵ゾ、年々獻納致シ度キ旨願ヒ出ソノ
田ヲ報德田ト稱シ昨壬申年マデ既ニ十九年納米忘
ルコナク年々救貧ノ資ニ供シ其餘金千五百二十三
圓八十八錢尙現ニ存在ス又報德教會ト号シ屢々各
村ニ會議ヲナシ米穀菜蔬ノ培養地味ノ檢査等互ニ
發明セシモノヲ討論シテ墜産ノ基ヲ起シ國家ノ恩
德ニ報シコトヲ謀ル其民事ニ辛勞スル功徳カラズ且
幼沖ノ頃慈母ノ庭訓ヲ片紙ニ記シ守ノ袋ニ納レテ
遺忘ニ備ヘ六十餘年ノ今日ニ至ル迄造次頓沛モ皮
膚ヲ離サズ恪守セリト其慈其孝縣令之ヲ奇特トセ
ラレ其賞トシテ三ツ組ノ銀盃ヲ下シ賜ヒタリ
予嚮キニ南橋散史ノ稔ニ倣ヒ大坂府下ノ三事ヲ
評シ以テ貴社ニ投シタリキ何ゾ料ラン速ニ刊刷
ノ勞ヲ煩ハシ猥リニ吟香君ノ高評ヲ辱フセント
ハ義賦々止ム可カラズ敢テ亦三事ヲ評シ以テ吟
香君ノ厚意ニ對フ 三 橋 外 史
○小學校
府下ヲ四大區ニ分ツ東西南北大區ニ小區アリ小區

予偶々緊用アリテ二州橋頭ニ至ル維時盛夏苦熱ニ堪ヘズ行歩殊ニ惱メリ百方措スルニ由ナシ幸ニ腰間ニ扇アリ之ヲ戴テ日光ヲ障ヘ既ニ某ノ邸ニ達スルヲ得タリ歸後流汗淋漓苦悶云フベカラズ是以テ扇ヲ開キ擺簸スルニ從ヒ涼風徐ロニ生シ精神爽快不覺熟眠ス鼻音嚶々夢ニ無何鳥ノ村ニ至ル其樂ニ融々タリ既ニ覺ム起テ日脚ヲ見レハ將ニ西山ニ傾カントス自驚テ曰我宜尼朽木ノ箴ヲ失シ擅ニ午睡ヲ貪リ兀々以テ斜陽ニ至ルヲ知ラズト歎息スルヲ再三ス凡ソ覆載ノ万有一物トシテ其職ヲ奉ゼザルナシ此扇能ク我が今日ノ難ヲ解ク是レ其ノ分ヲ盡スナリ古哲有言聖人寸陰ヲ競テヨク其業ヲトル况ンヤ庸人ニシテ分陰ヲ競ハザルベケンヤ我飽飡空ク光陰ヲ偷ムハ扇ニ及バザルヲ遠達ナリ干時雲霧四方ニ生シ咫尺驥々辨々可カラズ既ニシテ日暮ル、万家燈火ヲ點々光明煌々四方ニ散布シ殆ント不夜城ト疑フ予貪ニシテ未ダ蚊帳ヲ購フニ策ナシ忽チ聞ク耳邊物アリ其聲如雷如靈簇々羣ヲナシ其勢恰モ製スベカラサル者ノ如シ之レヲ屬目スレバ即蚊帳ナリ我嘗テ曆史ヲ一見スルニ蚊蠅集テ其聲雷ノ如シト今面リ其妄ナラザルヲ知ル此ノ時ニ方リテ復ビ扇ヲ探リ蚊蟲ヲ掃攘シ手ニ隨テ斃ルハモノ數十少シク其災ヲ防ケリ因テ思フ扇ハ五常ノ徳ヲ具ヘリト實ニ此夕ベ扇ナカリセバ殆ンド凌キガタカラントス是レ其ノ仁ナリ奇骨端然程要儼

ノ大小毎一年必考査セサルヘカラス唯與ニ言フ所ヲ望ムニ相逢唯道勸民去天下何曾見一人○腹中ノ貓啼 杯中ノ蛇影
 十七日 豆駿逢水 聖明ノ代猶此ノ懷襄ヲ致ス堯風舜雨ノ翻案○拷問說 用拷吾猶人也必也使無拷手○三絃濼愛松子雜論 建白會議擧征海官散許多ノ議論大絃颯々如急雨小絃切々如私語○板所ノ說 戶長ニ代ルニ小學教師ヲ以テシ出納課ニ代ルニ富商ヲ以テセント矯寸過尺
 十八日 士族ノ兒幸次郎無禮人ヲ斬ル 幸ヤ不幸武家ノ代ニ在ラズ
 十九日 角抵論 力士裸體ヲ尤ム違式ノ増補○彗星 災異ノ說ヲ作ス亦是一片ノ婆心問ク者迅烈必變スルノ意ヲ存セハ此レ可ナリ星體星質ヲ考フルハ分析者ノ家言我無關焉
 廿日 生徒試験法立ツ 檢セスンハ何ヲ以テ別タシヤ士徒皆檢定アリ我レ獨リ亡シ○鷓鴣字奇談 鷓鴣花風飛白ノ評不苟 ○皇后全國ノ嬖妻ヲ親諭シ玉フヘキノ議 皇太后在セリ府縣ノ老婆豈獨遺ス可ケンヤ○曆ノ細論 曰星曰圓曰運曰陰曰陽嗚呼天ノ曆數汝ガ口ニ在リ
 廿二日上田氏灣女ヲ乞フ 看護ノ條々嘉ニスベシ抑醜モ亦以テ己ム可カラズ然ラズンハ和田ノ巴ト評シ做サザル者幾ント希ナルベシ○埼玉縣告諭文 皇國ハ言靈ノ幸ハフ國ト目今ハ言靈ノ賑ハフ國

宮 除 臭 藥 壹袋 銀十匁 壹袋 二匁ヨリ
 此此藥不淨場へまげバ傳染病とよけ臭氣とけす事
 奇妙なり其用法ハ雪隠の桶のまじり又ハ中へ厚さ
 五歩計まきまきてよし既牛小屋家とやへ一めんま
 きてよろし委細ハ功能書よ記す
 賣弘所 東京本所緑町四丁目 鹿野本也製
 沖冠嶺正脩編輯 全十冊
 十八史略譯解書入
 此書ハ重蒙ヲメ此ニ階梯シ史學ニ進歩セシメン爲
 メ假字ヲ以テ文ヲ屬シ諸史ニ就キ專テ誤謬ヲ訂正
 シ其意ノ解シ難キ者ハ左傍ニ譯語ヲ施シ猶盡サハ
 ル者ハ監頭小註及ヒ畫圖ヲ載セ讀テ解シ易ク且ツ
 倦サラシム凡數万年間ノ治亂盛衰一目瞭然タラシ
 ム讀テ大方ノ諸君速ニ購求アラントテ伏テ冀フ
 東京發兌書肆 北島茂兵衛 吉川半七 長野龜七
 第六大區八小區北本所松倉町貳丁目百八番地坪三
 百八十坪餘建坪廿六坪土藏壹ヶ所長屋一棟物置壹
 ヶ所其外樹木石共右賣拂候間御望ノ御方ハ同所へ
 御入來可被下候
 下谷仲徒町四丁目十二番地々所二百二坪建家九疊
 拾疊四疊半ニタ間三疊ニタ間長四疊ニタ間勝手二
 間半ニ三間半僕部屋二疊建家惣瓦土藏一ヶ所へ御
 附右價金八百九拾圓ニ致賣却度御望ミノ君ハ該家
 來問ヲ希フ
 銀座町貳丁目三番地
 本局 日報社
 編輯 岸田吟香
 印刷 落合巖次郎